

#### 44 長崎浩齋『医者物語』と吉田長淑

津田進三

『医者物語』は、大槻玄沢や杉田立卿に学んだ越中高岡の蘭方外科医の長崎浩齋（寛政十一年—元治元年）の著作である。長崎浩齋の友人東條琴台が撰した『近代著述目録後篇』には、浩齋の著作として『蘭学解嘲』など九種の著書が載せられているが、この中に同名の著作はなく『医者物語、二』というのがこれに当るものかと思われる。しかしこの『医者物語』は一冊本であり、巻一から巻八まで合綴した二四〇頁にわたる厚い草稿本である。

この『医者物語』は天保四年から弘化三年にわたって書かれたもので、蔵書家で知られる浩齋が各種の医書や随筆などから医師たちの逸話や臨床例あるいは処方方の薬剤などを抜書して紹介しながら、自戒をこめて厳しく医

師の心構えを問うたものであるが、その一方で、医学の歴史に明るく、漢方医学にも造詣の深いこの蘭方医の医療観を知ることが出来る興味深い著作であろうと思われる。

試しにその二、三を引用してみると、

「業繁多ニナリテハ大部ノ医書ヲヨム暇ナキモノ也。然レドモコレヲ廃スベカラズ」

「我外科ハ、心手相応ジテ練熟セザレバ 術ヲ施シガタシ」

「医書ニテ覚タルハ楷書ノ如シ。病人ハ篆字ノ如シ。同ジ字ナレドモ形カハリタレバ一字モ読メズ。コレ師伝ト練熟トノ入ル所以ナリ」

「今ニ在テハ 古方ヲ好マザル人々モ大黄石膏ヲ恐ルル事ナシ、時世ノ流行何レヲ是トシ何レヲ非トセンヤ、聖人復出ズンバソノ論一定シガタカルベシ」

「医者自然之臣僕也、又人身中有一良医ト西説ニイヘルハ 難病治験方 喻嘉言曰腹中有一大薬ト云ル語ト暗合ス」

「近年和蘭陀流ノ医学流行スルニツケ 其弊モ亦随テ

生ズ」常談ニ蛮語ナドヲ遣フハヨロシカラザルワザニテ  
儒生ノ漢語ヲツカフニクラベテモ其イヤミヲ知ルベシ」

「実事ニ就テ其起因ヲ詳ラカニシ 藥物ノ性ヲ吟味ス  
ル事ナドハ随分ヨキ事ニテ 学ブベキノ第一ナリ」

ところでこの『医者物語』には、吉田長淑に関する次  
のような注目すべき記載がある。

「文政七年甲申夏、吉田長淑患脚氣、不服附子而歿于金  
府」

これによれば吉田長淑の病死は脚氣であった。わが国  
最初の蘭方内科医の吉田長淑は加賀藩医であり、文政七  
年藩主の急病のため江戸から急行して金沢で没したが、  
従来長淑の死因については『加賀藩史料』などの諸資料  
に病名の記載がなく、僅かに岡崎桂一郎『吉田長淑小伝』  
所収の大槻如電の記載が腸チフスか又は肺炎と推測して  
いるが、その根拠は示していない。

長崎浩齋は『泰西熱病論』『蘭薬鏡原』『泰西五診精要』  
など長淑の著作を精読しており、『吉田駒谷方鑑』を蔵し  
てその処方まで参考にしていて、この『医者物語』の別  
の箇所にも「健按、泰西熱病論(神経熱ノ篇)泰西疫論(神

経疫部)ニノスル竜腦ノ功 相反スルガ如シ」との記載が  
ある。そして、浩齋は長淑の死をすぐ師の大槻玄沢に知  
らせており、折返し玄沢からの書簡には「吉田長淑之  
事被仰下候、於金沢養生不相叶 去月十一日死去之由  
何共く、氣之毒千万不堪痛惜之至候」と記されている。

また金沢の棟岳寺にある吉田長淑の墓の台石には縁故  
者一三人の名が刻されているが、その中に杉田立卿の同  
門の先輩で『眼科新書附録』を書いた松田東英(就)と、  
浩齋の江戸遊学の頃からの親友の藤浦彦齡の名がみられ  
ることなども、浩齋の得た情報の正しさを思わせるよう  
である。

長崎浩齋の住む高岡は加賀藩領であり、同じ藩内の医  
師であり、しかも同時代人の蘭方医の証言として、浩齋  
の「吉田長淑脚氣病死説」は重視すべきものと思われる。

(J R 東海静岡鉄道健診センター)